

座談会〈抄録〉

日文研が語ってきた文明／語っていくべき文明

●劉建輝（司会）

3日間大変お疲れさまでした。今回は「岩倉使節団 150 周年に寄せて」というサブタイトルがついているので、いわば歴史の節目を押さえた、とてもタイムリーな国際会議ではないかと思う。実は先日の学術講演会で関野先生がおっしゃっていたように、今年はまだ日本が旧暦から新暦へ、つまり洋暦へ改暦した 150 周年でもある。私は全然気づかなかっただが、それを伺ったとき、これは今回の冒頭に使えるなあと思った次第である。岩倉使節団と改暦、二つとも重大な歴史的イベントだったと言っていいと思う。レベルは違うが、やはり大変象徴的な出来事で、まさにこの時点から日本はいわゆる旧文明を揚棄し、新しい文明を迎えたという、いわゆる文明の再構築の転換点だったと、私は再認識させられた。

ただ、今回の会議は、その二つだけではなく、もう一つ大きな歴史的結節点においても非常にタイムリーではないかと思う。これは初日に竹村民郎先生がいろいろご発言されたけれども、我々が今 20 世紀の数々の戦争や冷戦等々を経て、21 世紀に入ってからようやく地球規模の大同団結とも言えるグローバル化を迎えたかと思いきや、その反動としてナショナリズムも非常に進んでおり、世界各地でさまざまな紛争が起こっている。

またそんな中で、かつて 19 世紀の初頭において、世界の GDP の 3 分の 1 を占めていた中国は、約 200 年ぶりに世界に再登場して、いろいろな形で 200 年来の欧米を中心とする世界秩序に挑戦しようとしている。そのような意味において、このいわゆる再構築以来 150 年後の今日こそ従来の日本の立ち位置、日本の近代文明、ひいては近代文明そのものをもう一度考え直すという時期に差しかかっているのではないかと思う。

実際、今回のテーマは「日本文明の再構築」となっており、その起点とも言える 150 年前の岩倉使節団に焦点を当てている。先ほどの酒井先生のご講演、またこの 3 日間の議論をお聞きになれば分かると思うが、多くの場面において、既に現実的な問題、つまり、文明、ひいては近代文明とは何か、その行方はどうなっているのかという話に及んでいる。

これも実は先ほど申し上げた理由で、きわめて大事な課題だと思う。日文研は小さな所帯のため、その全部に挑戦することはできないが、やはりこのようなコンソーシアム、あるいはその他の形で海外、また国内の学者と一緒にこの問題を考えざるを得ないのではないかと感じた。ある意味では、ここの再構築という言葉は 150 年前の再構築だけで

はなくて、今後への再構築という意味も含意しているのではないかと私は理解している。

さて、このセッションのテーマは「日文研が語ってきた文明、語っていくべき文明」となっている。これは実は瀧井先生からいただいたタイトルであるが、私は絶妙なお案だと思っている。つまり、今年は日文研ができてちょうど36年目を迎えるが、この激動の時期において、日本文明の再構築、言い換えれば近代への転換以前の文明、またそれ以降の文明について、日文研という研究集団は、これまで一体どのようなスタンスで研究してきたのか、また今後どのような方向に向かっていくのかという点は非常に大事であり、そしてそれをめぐって岩倉使節団から150年経ち、また日文研の創立から30数年経ったこの時点で検証するということは、とても重要な事業の一つではないかと私は思う。

先ほど瀧井先生も触れておられたけれども、文明については、日文研は実はかなり重点的に研究してきている。まずここで想起するのは、90年代後半、日文研が京セラの援助を受けて、長江文明の探求というプロジェクトを立ち上げて、中国と協力しながらいろいろ研究を進めていた時のことである。私はその時通訳などを務めていたので、今でも覚えているのだが、98年に開催された「長江文明の探求」という公開講演会に梅原猛先生と北京大学の嚴文明先生が登壇され、その時、梅原猛先生がまさに「文明の発見」というタイトルでご講演なされたのである。

そしてその後、つまり2000年以降になるけれども、日文研はもう一度文明研究プロジェクトを立ち上げていた。それは科研という形で、山折哲雄先生、安田喜憲先生、そして川勝平太先生が中心となって進めておられた。ただ、長江文明の時もそうだったけれども、このプロジェクトではやはり日本の稲作文化、特に森の文化、または水の文化等々を強調していたように私は思う。それはまさに遊牧文化対稲作文化、つまり西洋文化に対抗するために日本文化のいわば独自性を追求していたわけである。

そして、この文明研究プロジェクトの一環として、当時はまた海洋文明、海洋文化というものを盛んに論じていた。それはつまり日本を海洋国家として、従来大陸との関係を、ある意味では断ち切った形で日本の特殊性、独自性を強調していたと思われる。

ここでもう一つ、日文研が文明に関して取り組んできたことを紹介しよう。これは今まで開催された共同研究を見れば一番分かりやすい。皆さんのお手元に日文研の歴年の共同研究のタイトルを記しているパンフレットがあると思うが、これを開くと、私たちがやってきた共同研究会の全てが一覧できる。ここでは2017年で切っているが、実は今数えると今年まで大体200ぐらいの共同研究が行われた。

このタイトルの一覧で分かるのは、やはり前半では日本文明や日本文化の特徴を探求するものが多いということである。つまりキーワードとして、日本または日本人の何々というものが多い。日本型モデル、日本型システム、日本文化の基本構造、日本文化の深層、日本の自然観、日本の創造力、日本の科学と文明、日本人の自我意識、日本の絵画、日本人の身体感覚、日本文明史の再建などなどである。やや私が意図的に選んだきらいがあるかもしれないが、日本という存在をかなり前面に出しているように感じる。

もちろんその中に批判的な、あるいは比較的な視点もあるだろうが、どこかで本質論的なものになっているのではないかと私は思う。ただこれらのすべてに私が参加していたわけではないので、これについては後でまた当事者の井上先生からいろいろご発言があるだろう。

そして、さすがに後半、つまり21世紀に入ってから、エリアスタディーズ、またはカルチュラルスタディーズ、コロニアリズム研究などの影響もあって、多くの共同研究において周辺諸国や欧米などとの関連性の中で日本を捉え直すという傾向が増えてきている。

特にこの外部との関連性から言うと、実は昨年末、日文研の主催による海外日本研究機関責任者会議を国際日本研究コンソーシアムの枠で開いたが、この中でも多くの海外研究者からは、やはり日本研究に対して日本特殊論を超えるべきで、より地域的な、あるいはより広いグローバルな視野の中で日本を捉えるべきだというご意見がたくさん寄せられた。このようなことも踏まえて、まず前半の日文研が語ってきた文明については、これに一番詳しい井上所長からいろいろご発言をお願いしたい。次にまさに外部からの視点ということで、スクリーチ先生が長年にわたる日文研との付き合いの中でいろいろ感じられたものがあるかと思うので、ぜひ先生からコメントを頂きたい。そして、後半の日文研が語っていくべき文明に関しては、日文研は、小さな所帯なのでそれについての指針をすぐ全面的に出せるわけではないと思う。ただし、一つの研究集団として、やはり日文研としてのスタンス、またこれから探求していきたいテーマみたいなもの、あるいは研究活動を進める上の注意点みたいなものを、ぜひご参会の先生方それぞれのご立場から語っていただければ大変ありがたい。どうぞよろしくお願いします。

●井上章一

私は若い頃は建築の勉強をした。酒井啓子先生のお話を伺って思い出したことがある。明治の中頃に鹿鳴館という施設ができた。この建物にはインドのイスラム様式が大幅に取り入れられている。たとえば、2階のベランダはインドのマハラジャの宮殿をコピーしていた。設計をしたのはジョサイア・コンダー（コンドル）というイギリス人である。イギリスのコンダーは、日本の建築教育にインドやイスラムの意匠を持ち込んでいる。これはドミナントな潮流にならなかった。しかし、日本の建築教育におけるサブドミナントな潮流としてインドやイスラムの意匠はある。

大正時代の京都にあった大丸百貨店は、イスラムのスタイルでできている。関東大震災を迎えたときの国技館、大相撲のスタジアムはイスラムの様式でできていた。現存するものを挙げれば、東京の築地本願寺辺りがインド的なイスラムの形をとどめている。

日本の建築家たちは今、世界に羽ばたいている。おそらくニューデリー工科大学でも、イスタンブール工科大学でも、安藤忠雄や隈研吾の名前は広く知られているはずである。日本の建築家たちを最初に世界へ羽ばたかせたのは、間違いなくサウジアラビアなどで

ある。産油国の仕事を背景に彼らは世界へ羽ばたいていった。

同じくサウジアラビアで仕事をした建築家に、日系のアメリカ人であるが、ミノル・ヤマサキという人がいる。ヤマサキはサウジアラビアのダーラン空港を設計した。そのダーラン空港はサウジアラビアで紙幣のイラストにも使われている。その後、ヤマサキはアメリカで大きな仕事を獲得するようになる。いちばん大きい仕事は間違いなくニューヨークのワールドトレードセンターである。その低層階に、ヤマサキはイスラムの様式を取り入れた。それがイスラム原理主義者たちによるテロの標的になったのである。建築は虚しいと思う。

おそらくエリアスタディーズの場で、建築が話題に上ることはほとんどないのだろう。日本におけるイスラムイメージを振り返るさいにも、言及されないのだと思う。そのことに文句を言っているわけではない。建築畑の人も、自分たちの仕事はその程度にしか評価されていないとわきまえるべきなのだ。少なくとも、人文社会諸学は暗々裡にそうとらえているのだと、かみしめる次第である。

私は建築や風俗の歴史を調べてきた。日本文明などという大きいことを考えたことはない。ただ、そんな私の耳にも届いてくる議論はあった。それらを記憶に残っている範囲で語らせてもらう。

やはりいちばん印象に残っているのは、日文研が行った長江文明プロジェクトである。世界の四大文明として、教科書的に語られる文明は四つある。ナイル川のエジプト文明、ティグリス・ユーフラテス川のメソポタミア文明、インダス川のインド文明、そして黄河流域の黄河文明。日文研は、中国の協力者もいたのだが、黄河の南側、揚子江（長江）にも偉大な文明はあったと言い出した。

発掘されて明らかになった長江の様々な生活様式を眺めていると、現在の雲南や貴州にも間違いなくそれらは届いていることがうかがえる。あるいは東南アジアの山間部や、島嶼部、そして日本列島にもその影は及んでいると思う。

日本と中国の関係を語るときに、伝統的には二つのタイプがあった。日本を中華文明、東洋文明の一角に組み込む議論である。もっと大きく広げれば岡倉天心のようにアジアは一つだというふうにとらえる見方があると思う。その一方、日本と中国の間に深い溝を見だし、日本文明を孤立的に位置づける人たちもいた。この二つとくらべて、日文研が提唱した長江文明論には、新しい構図もある。

黄河と日本列島の間には溝があったかもしれない。だけど、長江と日本列島の間には一体的なつながりがあった。そんな新機軸になったような気がする。つまり、日本と中国の関係を考える際に、別にそれを目指したわけではないのだろうが、日中をつなげる新しい橋渡しの見取図を提示していたのかなと私は思っている。

でも、これは文明論と言いながら、結局は文化論でもある。少なくとも文明と文化をはっきり分けてはいなかったと思う。その点で、いちばん両者をくっきり分けていたのは梅棹忠夫だった。日文研の人ではない。だが、日文研をつくる際に重要な役割をになっ

た人物の一人ではあった。梅棹忠夫は、ユーラシアの中で日本とヨーロッパだけが特殊だという議論をくりひろげる。ともに封建制を経て資本制に至る。こういう歩みをたどったのは日本とヨーロッパだけだと。すなわち日本文明はヨーロッパ型なのだと。

日本文化に対する梅棹の見方はこうであった。文化的には中国の要素を多く含んでいる。でも、それはたかが文化だ。見た目の形でしかない。日本の文明的な骨組みは違う。文明の骨組みはヨーロッパ型だと。梅棹は面白い比喻を使った。鯨の外見は魚に見える。だが、その内実は哺乳類だ。魚のように見える哺乳類があるのと同じで、日本文明はヨーロッパ型なのだと、そう喝破した。その当否はわからない。とりあえず、日文研及びその周辺で語られた文明論として、私が思い出せる立論を披露させていただいた。

私はブラジルのリオデジャネイロで3か月ほど授業をしたことがある。そのとき、私のことをリオデジャネイロ州立大学の文学部長に紹介してくれた先生は、井上の自慢話をしてくれた。「この人はたくさん本を書いている。日本ではすごく有名なんだ」と。私はこの紹介ぶりに、堪忍してほしいと思った。文学部長は私にこう尋ねた。「あなたはそんなに有名なのか」と。私は「とんでもない。私は本を書きますが、読者の数は大したことありません」と答えた。すると、部長は「You are modest」とまとめてくれました。

ところが、私を紹介してくれた先生は、後で怒り出した。「なぜ自分は有名だと言ってくれないんだ。紹介者の自分はメンツが立たなくなる。いや、それだけではない。日本人は大体ひきょうだ。ああいうときは引っ込み思案に振る舞えばそれですむと思っている。それは良くない」。「じゃあブラジル人なら、そういうときはどう言うのですか」こう尋ねると、「確かに私は有名だ。日本では谷崎潤一郎、川端康成、三島由紀夫、井上章一と並び称されている」と。本当にブラジル人がそういうふうに言うのかどうかは知らない。しかし、とても私にはできないと思った。

それと同時に、反省させられることがある。私たちは何か人に贈り物をするとき、「粗品ですが」、「つまらないものですが」と言う。なるべく自分をちっぽけに見せることですごく神経を使う。いつ頃からこういう習わしができたのか、誰か調べてほしいものだ。

ハンチントン日本文明を「引っ込み思案な、自閉的な文明だ」と言った。そう今日は教わった。理由の一つにあの控えめな自己表現があるのだろうと思った。でも、それを私は、悪いことだと思っていない。

日文研に海外から来られる日本研究者の方々を見ていると、概ね謙虚で、引っ込み思案だ。「俺の研究はすごいんだ」と言う人とは、あまり出会わない。そういう引っ込み思案な方に、居心地のよい環境を用意することが、今後の日本では、もてなしの課題になるのではないかと私は考えることがある。

一方で、建築である。今さっき、私は日本人のことを引っ込み思案だと言った。だが、河原町通りを見てほしい。隣のビルにデザインを合わせようとしているビルは一つもない。居並ぶビルは、みな自己主張の塊である。こんどは、ロンドンのリージェントストリートを想いうかべてみよう。同じ繁華街であるが、似たような形の建物が並んでいる。

非常に没个性的で、集団主義に埋没している。

銀座の街並みも、河原町とつうじあう。銀座も「俺が」「私が」というビル街である。シャンゼリゼ通りにあんな風景はない。でも、あの「俺が」「私が」という自己主張でできた日本の街並みが、世界に羽ばたく建築家を生んでいる。それはいいことなのかどうか。羽ばたいてることを良しとする人びともいよう。しかし、私は切ないと思う。パーソナリティは引っ込み思案で、謙虚をよそおいたがる。だが、ひとたび地権者となれば、ヨーロッパでもありえないエゴを発揮する。その分裂的な様相じたいは興味深い。まあ、個人的には、それほど強く自己主張できないが、それでも何かコツコツ研究しているという人たちの楽園に、日文研をできればいいなと思っている。

●タイモン・スクリーチ

“グローバル・ジャパニーズ・スタディーズ”という表現は、実は日文研に来る前にはほとんど聞いたことがなかったように思う。私は日文研に来て1年半しかたっていないが、その前に1年間ほど、東京の外国語大学に籍を置いていたことがある。そこでも、“グローバル・ジャパニーズ・スタディーズ”という表現を時々聞いたけれども、初耳であったので、どのように定義していますかと何回も聞いた。しかし、検討中という返事が多かった。私がこれまでこの表現を聞いたことがなかった理由は、我々外国人が日本語、日本のことを勉強するときには外からの目線で研究するので、グローバルだというのは当たり前だったからであると思う。私がロンドン大学にいた頃は、ヨーロッパ、中近東、アメリカ、北米、南米と世界中から留学生がやっていたので、同じ教室の中に国連があるようなものだった。そうした国際的な環境で日本語を用いて研究していたから、自動的にグローバル・ジャパニーズ・スタディーズになっていたのではないかと思われる。

二つ簡単にコメントしたいと思う。一つは、日本における学問の強さについてである。私が東洋アフリカ研究学院に籍を置いていた期間は約30年間であったけれども、同僚にはインド研究、アフリカ研究、中近東研究が多かった。それぞれの地域を研究している先生たちは、ほとんどの場合、共通語が英語であった。あるいは英語でなければフランス語かスペイン語、あるいはロシア語を使っていた。つまり、研究対象がアジア、アフリカでも、記録と文献がヨーロッパの言語で書かれており、あるいはその地域出身の人たちであっても、学問の世界に入るためには英語かフランス語かスペイン語を使わなければならないと考えられていたので、本当にネオコロニアルという感じであった。いろいろな違和感があったけれども、日本の場合は、ヨーロッパの言語ではなく、自国の言語で研究していたのである。

おそらく韓国学も中国学もそうではないのであるが、私の世代では韓国学はまだ非常に小さな分野で、中国には行けないし、自由な国ではなかった。その点、日本は非常に例外的で、日本のことを勉強し理解したければ、必ず日本に行って、日本の研究者の下

で研究しなければならなかったのであった。

それはもちろん学問的によいことである。それだけではなく、経験としても非常に楽しかった。私は3年間ほど東京の学習院大学で、江戸美術研究の第一人者である小林忠先生、今でもお元気な方ですけれども、その下でいろいろなことを勉強した。小林先生の下では、美術品の現物ももちろん研究したけれども、自身に足りなかった知恵を増やただけではなく、どのように日本人が自国の歴史、自国の美術史を研究しているかということも直に教わることができた。それは私の研究者人生にとって非常に重要なことであった。

先ほど申し上げたように、学問の世界では、日本はややユニークな立場だと思われる。その影響として、帰国してもそのまま日本の研究者の問題意識とか研究のやり方を守ろうとする先生もいる。欧米で活躍しても、日本で教わった研究のやり方をそのまま続けているのである。

ただし、そうした方のことを私は尊敬するけれども、帰国するとやはり欧米の生徒に教えなければならないので、どのように西洋の学問と日本の学問の間に架け橋をつくるかということが難しい。それこそがグローバル・ジャパニーズ・スタディーズの定義かもしれない。日本で情報をもって西洋の分析方法に当てはめるのではなくて、日本の文献と日本の歴史と日本人の研究のやり方と、西洋人の物の見方を合流することが、人によってやり方が違うけれども、そのコンビネーションがグローバル・ジャパニーズ・スタディーズの一番大きな定義の一つではないかと思われる。

二つ目のポイントは、日本の歴史上では当たり前のことであるけれども、比較的、外国から鎖ざされた時期があったということである。もちろん鎖国という言葉は非常に大きな表現で、この間私は別のイベントで発言したのであるけれども、鎖国という言葉は日本語ではなく、オランダ語からの訳語である。だから、鎖国では決してなかったけれども、それにもかかわらず自由交易でもなかったのである。

私はイギリス人であるから、イギリスの立場から考えると、イギリスから泳いで外国に行くことは不可能ではない。クレインス先生の母国であるベルギーであれば、歩いてもあつという間に外国に行くことができる。ところが、四方を日本海と太平洋に囲まれた日本にはそうした感覚がない。だから、その感覚のなさをどのように話題にするべきかということが一つのポイントだと思われる。

つまり、グローバル・ジャパニーズ・スタディーズの、「グローバル」の側面を重視するためには、国際的交流が活発であった時代をメインの研究対象にすべきではないかということである。例えば蘭学が盛んだった江戸時代とか、南蛮文化が栄えた織豊期とか、あるいは明治とか幕末など、そうした時期は非常に国際的に活発な交流があった。そのような時代をメインにすべきではないかということである。そうすると、自動的に国際的な研究になる。ただしその場合、比較的海外との交流が少ない時期をどうするかということが課題になる。そこは避けるのか。国際関係が少ない時代をどのように扱うかと

いうことは、もう一つ考えなければならないポイントがあるかもしれない。

特に西洋人、外国人のパースペクティブとしては、なぜ向こうの若い人が日本のことを勉強したいかという、西洋と違うからである。それはもちろん半分偏見で、まだ知恵がないから雑に考えているかもしれないけれども、戦国時代などがそうである。戦国時代はある意味で国際的な時期であったけれども、いずれにしてもそうした自分の文化の中で見えないものを海外で見て、ちょっとその方向に行って勉強したいという動機があるから、おそらく日本人が考えるグローバル・ジャパニーズ・スタディーズと西洋人が考えるグローバル・ジャパニーズ・スタディーズは多少違うかもしれない。それも踏まえつつ、一つの架け橋をどのようにつくるかということが大事である。

少しまとまりがない話であるが、つまり、最近よく聞くグローバル・ジャパニーズ・スタディーズという言葉には、まだきちんとした定義がないと言える。そのため、日文研を一つのベースとして、あちこちでこのようなことを一緒に考えながら、分野としての発展が進むとよいと考えている。

●安井真奈美

ただいまグローバル・ジャパニーズ・スタディーズ、あるいは国際日本研究のテーマの設定について話題になったことを受け、自身の研究を振り返りながら意見を述べてみたい。

私は、日本民俗学や文化人類学の立場から、それぞれの文化でお産がどのように行われてきたのかについて研究を進めてきた。自分が生まれ育った日本と、異文化のミクロネシア・パラオ共和国——かつて日本が南洋群島として統治していた地域——を選び、フィールドワークを続けながら、産むこと、産まないことについての歴史の変遷と現状を伝える民族誌の作成を目指してきた。その間、私は日本の大学、大学院で学び、その後、日本の大学に就職して、20年あまり民俗学を教えてきた。またフランスやハンガリーにて、短期間、日本文化について教える機会にも恵まれた。その際、日本文化を知らない人に、いかにわかりやすく伝えるかを考えることとなった。日本文化の諸現象を、日本での呼び方——民俗語彙やフォークタームではなく、誰にでも伝わる分析用語を用いて説明することは、文化人類学の分野では常に求められる点である。たとえば日本の村落には、村の人々が里山や共有地を維持し、利用する慣習があった。それを説明するとき、「入会」という言葉ではわかりにくい^{いりあい}が、共有財産を示す「コモンズ commons」という用語であれば、日本に限定せずに説明することができる。

用語の問題に加えて、どの社会、どの文化にも必ず生じる現象——たとえば命の誕生や死に関わる慣習や人々の意識についても関心を持ち続けている。私の場合、これらを研究テーマにすることで、日本の現象を他の文化と比較し、世界の中に位置づけようと試みて来た。

出産——広い意味でのリプロダクションを、近世から近代の流れの中で、また現代も

視野に含めて見てみると、人口学的な視点から国家政策の中で打ち出されてきた家族計画や、その背景にあった優生思想なども重要となってくる。国家の権力構造や医学の知識体系の中で、命の誕生や女性の身体が捉えられ、またそこに家族や地域、社会が関わっていく様子を描き出し、様々な地域との比較を試みたいと考えてきた。

現在、アメリカでは中絶の問題は大変大きな話題となり、政治的、宗教的なものの方の中で論じられている。日本は、必ずしもそのような状況ではないが、翻訳の問題に関連させて言えば、例えば墮胎を abortion と訳し、マビキを嬰兒殺しにあたる infanticide と訳す場合にも、その歴史的、文化的な背景を十分に考慮する必要があるだろう。日本では、近代の法制度の中で墮胎罪が制定され、1970年代のフェミニズム運動の高まりや、旧優性保護法が改正されて母体保護法となるなど、リプロダクションと女性の身体をめぐる歴史を踏まえておくことが必須となる。

その上で、命の誕生と中絶、また命の終焉である死について、改めて死生学的な研究を視野に入れて取り組んでいきたいと考えている。これまで日文研の共同研究会でも、死生学についてはさまざまな研究成果が蓄積され、重要な知見が盛り込まれてきた。私自身は2018年から2021年に「身体イメージの想像と展開——医療・美術・民間信仰の狭間で」という共同研究会を開催し、共同代表者のローレンス・マルソー氏とともに、昨年12月に『想像する身体(上) 身体イメージの変容』、『想像する身体(下) 身体未来へ』の2巻を上梓した。身体イメージについてのこの共同研究から、次は誕生と死について解明する共同研究を始めたいと考えている。

前日のシンポジウム「令和の岩倉使節団——自由で開かれた国際社会への貢献」では、越智郁乃さんが「動く墓」という興味深い捉え方で、死がどのように儀礼の中で演出されてきたのかをお話しされた。死の演出が常に創造され続けているという点は、出産の場においても同じようにあてはまる。出産の場には医療が大きく関わってくるが、そのような過程についても見ていきたい。

さらに、国際日本研究というグローバルな立場で研究を進めていくときに、文化人類学の分野において、日本の文化人類学者と欧米の文化人類学者の間に乖離があったことは事実である。しかし、それがだんだんと解消され、単に情報提供者として日本研究を進めたり、地域研究に留まったりすることは無くなりつつある。つねに開かれた研究として、日本文化の研究をわかりやすく発信し、理論の構築に寄与できるのが望ましい。それは一人で成し遂げることはできないので、日文研の共同研究会という、叡知が結集される機会を利用して、死生観の解明という新しい研究テーマで進めていきたいと考えている。

翻訳や理論化の問題については、共同研究会とはまた別の機会を用意して取り組んでいる。私は日文研に赴任する以前から、小松和彦日文研名誉教授が進めてこられた妖怪や怪異に関する共同研究会に参加してきた。研究会が立ち上がった当初は、「妖怪は、研究対象になるのですか」と、よく尋ねられたことを小松名誉教授が話しておられた。美術、文学、歴史、芸能史の分野などで独自に妖怪や怪談の研究を進めてこられた研究者

が集まり、共同研究会がスタートし、その末席に私も入れていただいた。

何回目かの「妖怪ブーム」が訪れ、日本のポップカルチャーの中でもたいへんな人気となり、現在、妖怪は世界から注目を集めるようになってきている。その間、日文研の妖怪プロジェクト室では、怪異・妖怪伝承データベースや怪異・妖怪画像データベースなどを制作して公開し、根強い人気を誇っている。日文研では妖怪の絵巻も収集しながら、デジタル化して公開することで、妖怪文化の世界への発信にも寄与してきた。

現在、日本の妖怪に興味を持っている海外の若者や研究者は数多い。昨年、日文研にて日中妖怪研究会を中国語と日本語の同時通訳で、オンライン併用のもとで開催した。その告知をした日に予約が殺到し、たいへんな人気であることを改めて知った。中国の研究者と、妖怪や怪異に関する研究を進める上で難しいのは、「妖怪」や「靈魂」という同じ漢字を使っても、表現している内容が異なっている、という点である。

また、日本の妖怪や怪異に興味を持った人々が、自分の文化を振り返ったときに、同じく妖怪に匹敵するものが存在していることに気づき、興味を持つこともある。妖怪を、たとえば *supernatural* や *monster* と訳してしまうと誤解を生み、*yōkai* という用語を用いれば、現代日本のポピュラーカルチャーに限定されてしまう恐れもある。日本の妖怪に匹敵する存在は、どの文化にも存在しているだろうが、それを包括する用語を用いて、理論化することが必要となる。それを経た上で、これまでの日本の妖怪研究を東アジア文化圏の中で捉え、妖怪に関する比較研究を進めていくことができるのだろう。

これまで幾度か「妖怪ブーム」が訪れたが、それほど何度も訪れるブームは、もはや妖怪が文化として定着したと言えるのかもしれない。日本の妖怪を基軸にして、東アジア文化圏にて、また世界各地において、妖怪に匹敵するものと比較を進めていく——ここに、グローバル・ジャパニーズ・スタディーズとしての一つの可能性があると考え。妖怪や怪異を描いた、日文研所蔵のさまざまな絵画資料は、これからの日本研究のグローバルな展開を後押ししてくれると確信している。

最後に人類学の立場から文明を捉えれば、扱う時代のスパンはより広くなる。また近年の「人新世」という捉え方のように、人類が地球に与えた影響を考慮し、人間中心の視点からは脱却した視点が打ち出されている。そうした視点を活かして、改めて命の誕生や死、そして妖怪なるものについて考えていきたいと思う。

参照文献：

荻野美穂『「家族計画」への道——近代日本の生殖をめぐる政治』（岩波書店、2008年）。

越智郁乃『動く墓——沖縄の都市移住者と祖先祭祀』（森話社、2018年）。

小松和彦・安井眞奈美・南郷晃子編『妖怪文化研究の新時代』（せりか書房、2022年）。

安井眞奈美、ローレンス・マルソー編『想像する身体(上) 身体イメージの変容』、『想像する身体(下) 身体未来へ』（臨川書店、2022年）。

●戦暁梅

日文研の戦です。昨年(2019年)の10月に日文研に着任しました。日文研の専任教員としては新米ですが、前任校に就職するまで、総研大院生に続き、中核的研究機関研究員、学術振興会の外国人研究員の身分で計7年半ぐらい日文研に在籍しておりました。今日は久しぶりに日文研に戻ってきた感想も含めて、以下の二点、発言させていただきます。

1. 日文研が中国の日本研究に果たした役割

「日文研が語ってきた文明」について、劉先生が共同研究のテーマなどで示してくださった通りだが、私はその立場を少しずらして、その共同研究の数々、また日文研という学術交流の場が世界的に果たしてきた役割について若干補足させていただきたい。

日文研の創立20周年の際に国際シンポジウム「日本文化研究の過去・現在・未来——新たな地平を開くために」が行われ、その報告書に当時天津師範大学の王暁平先生が寄稿した「中国学と日本学との握手」の一文がある。そのなかで、中国で80年代に入ってから日中比較文化の研究が盛んになったことについて触れられていた。なかでも中国で出版された開拓的な著書『比較文化、中国と日本』(吉林大学出版社、1996)を挙げられているが、その著者六名(嚴紹盪、王家驊、馬興国、王暁平、王勇、劉建輝)は、改革開放後の中国における日本文化研究の先駆者の方々と、それぞれのご専門の立場から日本研究という学問の基礎を中国で築いた。また、劉先生も含めてすべて「日文研」の経験者だったことも王暁平先生は指摘している。つまり、改革開放後の中国における日本研究という研究分野の形成に、研究の視野から方法にわたり、日文研はすでに重要な一翼を担っていた。この中国の例からうかがえるように、日文研は創設当初から国際的日本研究のプラットフォームとして、よく機能してきていることが言える。

その後1990年代、2000年代頃から今に至って、中国の新世代の研究者の日本に対する関心の変化を常に感じている。今の中国の若者は、日本の漫画アニメを見て育った世代であり、日本語や日本文化についての翻訳書や情報が大変豊富で得やすい環境にいる。若手研究者の多くが早いうちに日本留学の経験を持っていることもあり、彼らの日本理解は自然に多元的になり、そして研究の関心も多様化、専門化してきている。そういった多様な日本理解や関心について、これから日文研がいろいろな事業を進めていくなかで、常にアンテナを立てて目を配る必要があるだろうと思っている。

2. 研究軸の変化に応じた貢献と研究資料の継続的な充実化

次に「日文研が語っていきべき文明」について、私が理解するには、研究内容の方向性の変化はそれぞれの分野の研究が進むなかで自然発生的に起きるべきもので、日文研がその動向を捉えつつ、様々な分野の研究者が個人でなかなかできないような研究活動

にどのように協力し、つなぎ役をしていけるか、ということを考えるのがとても大切である。その意味から、日文研が語っていくべき内容そのものよりも、日文研が今後に向けての「語り方」について少し考えたことを申し上げたい。

一つは、研究軸の変化に応じて、日本との関わりについての他文化の研究への貢献。

中国の近代美術史研究の例の一つ挙げたい。数年前に前任校で国際交流基金「日中知的交流強化事業 中国知識人・研究者招へい事業」に協力したことがあり、中国芸術研究院華天雪 (HUA Tianxue) 先生の受け入れ教員として在日中の研究調査活動のサポートをしたことがある。このプロジェクト自体は、日本語が堪能でない方、日本について予備知識がほとんどないような中国の研究者を対象とした支援プログラムであり、華天雪先生は長年、近代中国美術の代表的な画家・徐悲鴻 (XU Beihong) についての研究で知られている。徐悲鴻は、近代中国美術史のなかでフランス留学帰りの洋画家として語られているが、実際フランス留学に向かう前に、恋人と駆け落ちして半年ほど日本に滞在したことがある。だが、この半年の日本滞在のことはこれまでほとんど注目されてこなかった。しかし、徐悲鴻がこの短期滞在中に日本の「文展」で得た視覚体験がその後の代表的な歴史画創作に生かされていた可能性があったことを、華先生が日本で調査で気づいて、論文にまとめた。近代中国美術史の上では実に大きな発見だったと言える。こういった日本体験についての研究は、日本文化の特殊性を解明するというよりも、隣接する、あるいは関連する他文化の解明に貢献するものとなる。研究者に日本文化について深い理解があることがもちろん望ましいが、しかし現状では必ずしもそうではないことが多々ある。各分野の研究がグローバルな視野のもとで今後深まっていくにつれ、日本語や日本研究を専門としていない外国の先生方と共同研究したり、またその研究に協力したりすることも必然的に増えるだろう。このような研究の軸の変化に応じて、日文研の一員として心の準備をしなければならないと考えている。

もう一つは、研究資料の継続的な充実による貢献。

その意味で、非常にありがたいことに、日文研図書館はすでに大変包容力のある資料収集の仕方をしている。日文研に戻って図書館によく行くようにしているが、中国語の図書、資料について感心したのは、中国語圏の日本研究の成果の書籍だけではなく、近現代中国の新聞雑誌、地誌、档案 (中国の公文書) など、中国史研究のベースになるような資料が豊富に揃えられていることである。これは日中関係を専門とする研究者にとって非常に心強いことである。研究者はやはり研究資料が豊富にあるところ、利用しやすいところに大きな魅力を感じるのではないか。この点は今後もぜひ続けてもらいたいと願う次第である。

【まとめ】

●劉建輝

私は、もともと国文学の出身で、その後、比較文化、比較文学の分野に入ったけれども、実は自分の専門に対して、常にジレンマを抱えている。つまり国文の場合、おそらく国史もそうだと思うが、これまではまさに先ほど酒井先生がおっしゃったように固定され、また閉じられた世界であった。研究者はその狭い世界の中で競って問題だと思われるものを深く掘り下げていく。しかし、比較文学や比較文化の分野に入ってみると、こちらは実にオープンで、他文化との比較もできて、大変幅広いが、国文学の立場から見れば、やはりいろいろ掘り下げが不十分だと感じてしまう。もちろん逆に比較の立場から見ると、いわゆる国文、この場には国文出身の方がいらっしやるとちょっと失礼だが、やはり狭い世界で重箱の隅をつつくような研究をしているように見えて仕方ない。

そして、私はこのジレンマは、さきほどスクリーチ先生がおっしゃっていたグローバル・ジャパン・スタディーズの内包する矛盾とどこかで連動しているようにも思う。その拡大版はいわばグローバル・ジャパン・スタディーズの矛盾である。

また、先ほど井上先生がおっしゃっていた日本の特殊性の問題も、ある意味ではこれと関連しているのかもしれない。つまり、日本の内部だけを掘り下げていけば、当然いろいろな特殊な要素が出てくる。一方、それを国際的にまたは地域の中で考察すると、こちらも当然のように一種の関連性ないしは共通性が見えてくる。じゃあどちらに重点を置いてやるのか、私はそのどちらも大事だと思う。だからグローバルに重点を置くのか、ジャパン・スタディーズに重点を置くのかという二者択一ではなく、両方を同時に進めるのが不可欠だと認識すべきである。

日本の特殊性で言うと、私はだいぶ前に、これも日文研の先生からだったと思うが、世界地図を真ん中から折ると、その両サイドにイギリスと日本があって、この両国はいわゆる大陸文明、文化と違ってそれぞれ独自でしかも共通する文明、文化を持っているのだよと言われたことがある。そのときはすごく納得して、なるほどなと思った。たしかに双方とも島国で、それぞれヨーロッパとアジアの大陸文明に対峙する部分がある。その意味で考えれば、こういう文明論上の議論も当然無視することができず、私はやはりどう両者をバランスよくやっていくかが、むしろ今後の課題になるかと思う。つまりこの特殊性と普遍性の間で、私たち日文研が一種のパイプ役みたいなものとして、その役割を果たしていくべきではないかと感じている。

先ほどのご発言の中で、スクリーチ先生が日本の学問の強さという表現を使っておられたけれども、私も今、戦先生が挙げられた中国の例で言うと、それを強く感じている。実は最近、中国ではいわゆる日本学が非常に盛んで、そして、日本由来の学問の方法論も学界でかなり浸透している。日本に留学し、日本の学問を勉強して、中国に戻ってからそれを普及させようとする研究者も沢山いるし、中には日文研のスタイルを真似しよ

うとする学者グループさえある。

戦先生が例に挙げられた中国の90年代では、純粹の日本研究者も日中の比較をする研究者も、その大半は全部日文研の経験者である。まさに彼らが近代以来はじめて集団で中国の日本研究を立ち上げたのである。

このような事情で、いわゆる日本の学問的専門性というのはヨーロッパとはまた若干違う意味で、中国やその他の発展途上国にとって、やはり相当の強さを持っている。それを単純に弱体化させ、安易にグローバル化するだけでは大変もったいないと思う。

先ほどの安井先生のご発言から、私はそこに縦と横の二つの軸が存在するように感じた。つまり生命の誕生、また生と死などについて、自国の歴史的な変遷の中で探求する一方、同時に他文化との比較の中でそれを捉えることも大変重要だというふうに理解した。

特に先生が最後に言及された妖怪研究は、それ自体日本発祥の学問だったかもしれないが、それが中国に受け継がれて、今となっては日本よりも盛んなぐらいで、妖怪学会まで作られている。

このように、私は以上の4人のコメントを伺って、今後、私たちが常にこのような大きなネットワーク、あるいは大きな縦軸と横軸の中でそのジャパニーズ・スタディーズの部分とグローバルの部分、つまり日本的な部分と国際的な部分をバランスよくやらないといけないなということを強く感じた次第である。

そして最後、やはり日文研はその中でどのような役割を果たすべきかということも大いに再認識させられた。たとえば戦先生がおっしゃったように、日本研究者以外の学者に対してどうサービスしていくべきか。実はこれも非常に大事で、それこそジャパン・スタディーズを超えるより高度な学問体系を目指すために、私たちはこういう観点も常に視野に入れなければならないとつくづく思うようになった。